

# 皮膚と体温の境目



## 両腕

---

ふと気付いたら両腕が無くなっていたので大層焦っていたら、昨日の晩に夢を見た人から電話がかかってきた。

「やあ。君のっぼい両腕が離してくれなくて困ってるんだけど、心当たりは？」

羞恥に溺れながら「すぐに行く」と応えると、

「迷惑だけど嬉しくもあるね」

彼の腕も私の所にきた。

## 彼はいつも花を落としている

---

彼が歩く後には花が落ちる。

ある日、どうしても触れたくなくて水色の花を一輪拾い上げたら、  
ずっと先を歩いていた彼が首をこきりと鳴らして、  
空を幸福そうに見上げた。

彼が視界から消えると掌の花も消え、  
噓せ返りそうな香りだけが指先に残った。

彼は今日も花を落としている。

## 感情の言葉

---

「嫌い」と言ったら「何で一々宣言するの」と聞かれたので、  
泣きそうになりながら持っていた携帯電話を投げつけた。

彼女は「貰っちゃうよ」と見せつけるように携帯電話を覗きむと、  
眉間に浅い皺を作りながら「私も嫌い」と笑って、

私が打ち込んだ「好きすぎて」の文字を指で撫でた。

## 遠くて近い音

---

少年は毎日電車に乗って女のピアノを聴きに行く。

少年が通い始めて二ヶ月が経ったある日、  
女はブロック塀の飾り穴から少年の存在に気付いた。

「どこの坊や？」

「ここの」

「あら」

少年の子供らしい茶目っ気に女は笑う。

少年も頬笑んで、  
今日もまた母のピアノに耳を柔らかく澄ました。

## 誰のための料理

---

落ち込むと料理をしだす彼の癖は、常に強い苛立ちを男に与えた。

それでも男は今日もまた彼のために料理を口に運んでやる。

そうしたら彼が珍しくも感想を求めてきた。

「美味しい」と応えかけた男は、  
そこでやっと自分が泣いている事に気付く。

料理からは穏やかな慰めの味がした。

## 薬になった僕

---

彼女を驚かせようと思い、薬になってみた。

飲む直前で元の姿に戻る筈だった。

けれども何故か巧く戻れず、  
僕は彼女に呑み込まれてしまった。

残された数時間で僕等は感情の全てをぶつけあい、疲労した。

そうして最期、彼女のお腹には、  
溶けきった僕と愛の言葉だけが残った。

## 見える物、見たい物

---

起きたら視力を失っていた。

男は怖々と家族の名を呼ぶ。

だがいくら待ってもいらえは無い。

静寂の重みにとうとう絶望すると、頬に温もりが生まれた。

家族 だった。

男は最初から家族に守られていた。

その事に気付いた男が家族をかき抱くと、世界は瞼の向こうで色を取り戻していった。



## 撫でられて

---

猫になれるというので成ってみた。

家族が飼い主になった生活は快適で愛情深く、幸福だった。

次第に人間の己を忘れ始めた時には慌てたが、  
人間に戻る踏ん切りは中々つかず、  
最後の日は常のように寝ている内に終わってしまった。

最後に私は、  
読み途中だった本の結末を考えていた。

あなたと、わたし

---

人間の輪郭線が曖昧な世界になった。

炬燵を囲めば足同士が融合する。

手を繋げばどこまでが自分の肌なのか見失う。

少女達は半身を混ぜ合いながら

「互いを感じられないって寂しいね」と呟き合うと、

諦めて、

完全に一つになった。

二人が居なくなった跡に新しい子が一人、生まれる。

## 融合

---

彼女を驚かせようと思い、薬になってみた。  
飲む直前で元の姿に戻る筈だった。

けれども何故か巧く戻れず、  
僕は彼女に呑み込まれてしまった。

残された数時間で僕等は感情の全てをぶつけあい、  
疲労した。

そうして最期、彼女のお腹には溶けきった僕と、愛の言葉だけが残った。

## 皮膚と体温の境目

<http://p.booklog.jp/book/25430>

著者：蓮

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hazyuki/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25430>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25430>